別紙４

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	若者の夢追いライフコース形成に関する社会学的研究 ――バンドマンを事例として――
氏　　名	野村駿

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は、「音楽で成功する」といった夢を掲げ、その実現に向けて活動するロック系バンドのミュージシャン（以下、バンドマン）を事例に、夢を追うというライフコースがいかに選択・維持・断念されるのかを明らかにすることである。そして、特に若者文化の影響に着目しながら、若者を夢追いへと駆動させるメカニズムについて検討する。

若者の夢追いを考えるにあたって、1990 年代以降に顕著となった 2 つの社会変化を押さえる必要がある。1 つは、教育の文脈における変化である。学校教育の個性化・多様化政策やキャリア教育政策をはじめとして、子どもの「やりたいこと」や「将来の夢」を重視する方向性が提起された。現在でも、例えば、「第 3 期教育振興基本計画」（2018 年度～2022 年度）において、「今後の教育政策に関する基本的な方針」の 1 点目として「夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」ことが指摘されている。もう 1 つは、労働の文脈における変化である。特に、長期経済不況を背景として若者の学校から職業への移行が不安定化・困難化し、安定して正規就職できない若者が増大した。多くの若者就労支援政策が実施されるようになったのも、2000 年代以降の大きな変化である。

本論文では、この 2 つの社会状況の結節点に若者の夢追いという現象を位置づける。つまり、一方で教育の文脈においては、夢を持つことや追うことが積極的に承認されるからこそ、夢追いという進路は導かれやすくなっている。しかし、他方でそれは不安定就労という形での移行を促進させる。教育と労働の狭間において、不安定な移行を伴いながら積極的に選択されるのが夢追いというライフコースなのである。では、なぜ若者は先行き不透明な現代社会において、夢追いという進路を選択するのか。また、離学後には、なぜ夢を追い続け、いかなる契機によって夢を諦めていくのか。夢追いライフコースの選択・維持・断念から成る夢追いライフコース形成のプロセスとその析出メカニ

ズムを明らかにすることが本論文の主たる研究課題である。

以上の問題関心に基づき、序章では、「若者文化と進路形成」の研究領域を確定させるべく、先行研究の整理を行った。具体的には、若者文化が進路形成と結びつくことで夢追いとなる点を踏まえ、ヨーロッパにおける若者研究の包括的レビューを参照して、国内外における若者文化研究と若者移行研究の到達点と課題を指摘し、若者文化が特定の進路形成を促すメカニズムを検討するという本論文を貫く視角を導出した。以下、8 章からこの問題について論じていく。

第 1 章では、本論文の位置づけを明確にするべく、若者の夢追いに関連する先行研究の検討を行った。その結果、課題として次の 3 点を指摘した。①実際に夢を追う若者の実態が明らかにされていないこと、②特に夢追いライフコースの維持や断念に関する検討が十分でないこと、③個人の行為主体性や、出身階層・学校・労働市場という社会構造ではなく、若者文化が持つ固有の影響が検討されていないことである。そして、演劇やスポーツといった文化実践に関する研究を参照して、ロックバンドという若者文化が個人のライフコース形成を規定するという本論文の視点を明確にし、個人の行為主体性と複数の種類・次元からなる社会構造の両方を包含した分析枠踏みを生成した。最後に、本論文で使用するデータの特性と調査の概要について述べた。

第 I 部（第 2 章～第 4 章）では、バンドマンたちが離学後の進路として夢追いライフコースを選択するメカニズムを検討した。第 2 章では、夢追いライフコース選択を可能にさせる条件を明らかにした。まず、音楽活動を始めた契機として、家族と学校を指摘し、その後は音楽を中心とした進路選択が行われていることを論じた。そして、夢追いライフコース選択に踏み切らせる条件として、①ライブハウス共同体に参入していること、②自分のやりたいことがバンド活動であると認識できること、③自分にはできると思えることの 3 点が明らかとなった。

第 3 章では、バンドという若者文化そのものの構造に視点を置き、集団で夢を追うことのリアリティを記述した。ある 1 つのバンドを集中的に取り上げ、その結成から解散までのプロセスを描き出しながら、バンドという活動形態の集団性とメンバー間の相互行為が、夢追いライフコースの選択に影響を与えていることを明らかにした。つまり、集団で夢を追うからこそ、個人的な夢とは別にバンドとしての夢を共有する必要がある。このバンドとしての夢の共通化・共有化を通して、バンドという集団で活動することが可能になっている。しかし、そこでは個人的な夢とバンドとしての夢を同時追求可能にさせる極めて不安定な解釈実践が介在しており、それが破綻することで容易に集合行為としての夢追いは困難になり、バンドの解散が導かれていた。夢追いライフコースの選択は、こうした集団性を帯びた形で展開されているといえる。

その一方で、第 4 章においては、夢追いライフコース選択に伴う雇用形態選択の

問題に取り組んだ。つまり、バンドマンたちがなぜ夢を追うにあたって積極的にフリーターとなるのかを検討すると同時に、フリーターではなくあえて正社員となった者も取り上げることで、夢追いライフコース選択に伴う雇用形態選択の分化と文化を明らかにした。まず、フリーターであることが集団として夢を追う彼らに多くの恩恵をもたらしている点を指摘し、かつフリーターであることを可能にさせるような構造的特質が音楽業界に存在することで、積極的なフリーター選択・維持プロセスが確認できると結論づけた。そして、「バンドマンはフリーターでなければならない」という価値規範に対抗して、正社員バンドマンという夢追いの新たなモデルになるべく活動する者がいることも指摘した。こうして、夢追いライフコース選択に伴う雇用形態選択は分化するとともに、その分化を導く文化がそれぞれ存在することが明らかとなった。

第Ⅱ部（第 5 章～第 6 章）では、一度選択された夢追いライフコースが維持されるメカニズムを論じた。まず、第 5 章において、バンドマンたちが実現を目指す夢の中身と語られ方に注目した。夢の中身が「音楽で売れる」から「音楽を続ける」などへと変化していること、夢の語られ方が「音楽で売れる」を臆面もなく語るものから具体的かつ段階的に夢を語るものへと変化していることを指摘した。そして、その背景には、ライブハウス共同体におけるバンド仲間の存在があり、自らの状況に合わせて参照するバンド仲間を選択的に操作することで、また時間軸までもを操作することで、夢を追い続けられる状況が作り出されているとした。

その一方で、第 6 章では夢追いを否定される経験や失敗・挫折経験に着目した。家族との相互作用では、その関係性如何にかかわらず、夢を追い続ける動機が独自の解釈実践によってもたらされていた。加えて、正規雇用へと促す否定的な作用に対して明確な抵抗姿勢が確認された。これらの背景には、夢追いを肯定する者しかいないライブハウス共同体があった。つまり、ライブハウス共同体が、共同体外部からの否定的作用に抗する基盤になるとともに、その内部においては、バンド仲間との競争意識が醸成されることで、夢追いライフコースは不断に維持されていたのである。したがって、バンドマンたちは、夢追いを否定されたとしても、またたとえ失敗や挫折をしたとしても、そこから立ち直る資源をライブハウス共同体から調達できるために夢を追い続けることが可能になっていると述べた。

第Ⅲ部（第 7 章～第 8 章）では、夢を諦めるプロセスを検討した。まず第 7 章では、バンドマンたちが夢を諦めることをどのように捉えているのかを分析し、バンド活動への意味づけが重要なポイントであることを指摘した。つまり、「音楽をやめる」といった行為レベルではなく、何のためにバンド活動を行うのかという認識レベルでの変化が、夢を追っているのか否かを判断する重要な基準になっていた。そのうえで、実際に夢を諦める旨が語られた 3 名のライフヒストリーを素材に、自己納得を伴う形での夢追いライフコースの断念メカニズムを明らかにした。導出され

たのは、〈家族〉〈バンド仲間〉〈仕事〉という 3 つの要因である。つまり、それらは一方で、夢追いライフコースの選択・維持段階において重要な影響を与えるとともに、他方で、結婚や正規就職といったライフイベントを契機として、反対に夢追いライフコースの断念を導いていた。そして、彼らには納得して夢を諦めるだけの準備期間が存在することを指摘し、セカンドキャリアへとスムーズに移行することが可能になっていると論じた。

それに対して、第 8 章で検討したのは、さまざまな問題に直面する中で夢が追えなくなり、非意図的に夢追いライフコースの中断や断念が析出されるメカニズムである。バンドマンたちは、標準的ライフコースの正当性を理解し、かつ自分が非標準的な夢追いライフコースをたどっていることを自覚している。それゆえに、将来への不安を強く感じていた。しかし、だからこそ、常に自分の正当性を提示せざるを得ず、その結果として夢追いに過剰なまでに専心し、多くの身体的・精神的問題を抱え込んでいた。また、それらの問題は「やりたいこと」をやっている自らの責任として引き受けられていた。標準的ライフコースの規範性による抑圧と、それへの抵抗および自らの正当化の実践として、過剰な夢追いへの専心が導かれ、その結果として身体的・精神的問題が自己責任のもと蓄積された結果として、夢追いライフコースの意図せざる中断・断念が析出されていたのである。さらに、その中断・断念は突如として起こるものであるため、セカンドキャリアへの移行準備もままならない。なおかつ一度抱えた身体的・精神的問題は、その後のライフコースにも多大な影響を及ぼし得る。したがって、彼らは多くの問題を抱えながら、不安定な生活を余儀なくされていた。ここに、現代社会において夢を追うことの問題性が指摘できる。

以上の検討を踏まえ、終章では知見の総括を行うとともに、夢追いライフコースの選択・維持・断念メカニズムをそれぞれ考察した。なぜ若者は夢を追うのか。本論文の知見を用いて応答するならば、若者文化のサブカルチャー—個人の行為主体性を規定し、かつ固有の影響力を持つ、相互行為や行動様式、価値規範、制度的・組織的規制など—が、他の社会構造（「教育」「労働」「家族」）や若者個人の行為主体性と重なりながら影響することで、若者の進路形成を夢追いという特定の方向に水路づけているからである。それは、一方で複数の構造的規制に規定されながらも、他方で決して受動的なものではなく、その中において若者たちは個別の解釈実践と対処実践を行っている。そして、若者の実践が複数の構造的規制を強化し、かつそれらを組み替えながら入れ子構造のごとく作用することで、夢追いライフコースは形成されていた。最後に、本論文のインプリケーションとして、第 8 章で明らかとなった夢追いに伴う問題状況の考察から、標準的ライフコースに限られない、多様な生き方を承認する規範理論が必要であることを指摘した。